

「音楽とは何か?」という問いは、多くの人びとにとって永遠の問いに他なりません。しかし反対に「音楽ではないものは何か?」と問えば、少し回答しやすくなります。私たちが現在、何気なく受け入れている多種多様な音楽はどれもこれも、数百年前の人々にとって音楽としてありがたがられるようなものではないでしょう。それらの多くは、かつて音楽ではなかったかもしれません。時代がくだるにつれて人々は、それまで音楽ではないとして分類してきたモノを音楽として受け入れるように変化したとも考えられます。いったい何が、人々をそのように変えてきたのでしょうか。

音楽という表現の拡がりとともに

〈MoMAS空間音響ライブ〉は昨年度に2回(2008年7月、11月)、同じ埼玉県立近代美術館の講堂において開かれました。それを引き継ぐかたちで開催されたこの第3回は、「音楽という表現の拡がりとともに」というサブタイトルが示すとおり、それぞれ独自の表現世界を拡張し続けている作曲家6名の参加を得て実現しました。

彼らは皆、既存の音楽を作ることに飽きたらず、コンピュータの中で練り上げられる計算的な世界、そこに接合される人間性、そうした正反対の性質をもつ両者のコラボレーションから音楽を作り出しています。非論理的な人間の感性は完全に無矛盾なコンピュータの思考パターンを拡張しますが、一方でコンピュータにとって非論理的な人間の感性は時にフレーム問題を解決してくれる突破口にもなっています。そんな両者のコラボレーションから生み出される音楽は、作曲家がコ

ンピュータで「演奏」を行う作品、アコースティックな楽器やソプラノなどのライブパフォーマンスとコンピュータが「競演」する作品など、単なるコンピュータによるシミュレーションではない表現世界の、さまざまな不思議な響きで会場を満たしました。

聴き手と共に

わかりにくい音楽に興味を持つ人はまれです。しかし、なぜ、どのような理由があって作曲家は、そのような、わかりにくい(しかも収入に結びつかない)音楽を作り続けるのか、という事柄は多くの人々に興味を持ってもらえるのではないのでしょうか。この企画では、そのような音楽をコンサートホールのステージから無理矢理に聴き手に提示するのではなく、むしろその音楽の音だけから聴こえてくるのではない、多くのモノを共に捉えることを重視し、その創発のアイデアを多くの人々と共有することを目的として、作品演奏に先立ち「トークセッション」を実施しました。

司会を担当された沼野雄司さん(音楽学・桐朋学園音楽大学准教授。1965-)は現代音楽についての研究をライフワークとする音楽学者であり、ステージに並ぶ作曲家のそれぞれの文脈におけるテクノロジーと音楽の在り方について、とてもフレンドリーな語り口でトークを盛り上げていただきました。また聴き手からも、作曲家に対して興

味深い質問が投げかけられました。「トークセッション」の空気は今後、埼玉から発信されるであろう新たな音楽表現の枠組みを予期させるものがありました。

先端的音楽表現

フランス生まれのフィリップ・シャトランさん(1972-)は10年以上も日本を活動の拠点としており、ラップトップ・オーケストラをはじめ、多くの主要なテクノロジー音楽の場で活躍する作曲家。ラップトップから放出されるエネルギーでありながら細部まで彫琢されたノイズが、マルチチャンネルで空間に投影されました。土屋雄さん(1968-)は、オンド・マルトノの研究などテクノロジーと音楽とのかわりに関するエキスパートでもあり、その作品は池田万里子さんによる箏の演奏をリアルタイムで音響・空間処理し、箏がもたらす伝統的な響きと音響計算された音との絶妙なグラデーションは聴き手を包み込みました。由雄正恒さん(1972-)はソプラノにさかいいいしうさんを迎え、彼女の声とコンピュータネットワークのフィードバックによって、コンピュータが奏でる意図されたチープさを持った自動伴奏と歌手が練り広げる無国籍風な、時代も不明な不思議な歌謡を展開しました。柴山拓郎(1971- 筆者)は、岡野勇仁さんがキーボードからたたき出すリズムを動力源としたピアノの音の



演奏プログラム	
1. 「シガミックな!(Lâchez prise!)」	作曲:フィリップ・シャトラン 演奏:フィリップ・シャトラン(コンピュータ)
2. 「すべてがすべてのなかに 箏とエレクトロニックのための(2009)」	作曲:土屋雄(東京音楽大学講師) 演奏:池田万里子(箏) / 土屋雄(コンピュータ)
3. 「cantata no.1 一人のヴォーカリストとコンピュータのための」	作曲:由雄正恒(昭和音楽大学講師) 演奏:さかいいいしう(ソプラノ) / 由雄正恒(コンピュータ)
4. 「Sliced Piano Projections→Piano Phrase(2009)」	作曲:柴山拓郎(東京電機大学理工学部講師) 演奏:岡野勇仁(キーボード) / 柴山拓郎(コンピュータ)
5. 「不可知なる人へ(To the Agnostic Man)」	作曲:古川聖(東京藝術大学美術学部先端芸術表現科准教授) 演奏:曾我部清典(トランペット) / 菊地秀夫(バス・クラリネット) / 古川聖(コンピュータ) 映像デザイン:ロバート・ダロル 映像プログラミング:佐近田展康 アプリケーションプログラミング:柴田悠基
6. 「Babita + Ngouc Song」	作曲:カール・ストーン(中京大学情報メディア工学科教授) 演奏:カール・ストーン(コンピュータ)



ぶつ切りを空間に放出する作品を提示しました。これは本人による可塑時間的位相変位プロセスという音楽生成・空間散逸理論に基づいています。古川聖さん(1959-)の作品は、コンピュータの画面上に現れる幾何学的な図形の回転周期にトランペット(曾我部清典さん)とバス・クラリネット(菊地秀夫さん)が点描的な音を重ねていきます。コンピュータもピアノやバイオリンの疑似音を発し、その場で生成される音楽と、人間とコンピュータが発するそれぞれの楽器音の合奏体が出現し、次

に生まれる瞬間がまだ誰にとっても未知なる世界であるというスリルを堪能することができました。カール・ストーンさん(1953-)はアメリカと日本を歩き来しながら80年代から活動している、サンプリングによる音楽表現を続ける作曲家。ステージ上でコンピュータを繊細に操るその動作は、まさに楽器を演奏するかのような、それでいて慎まやかな身振り。その視覚要素は、スピーカーから流れるさまざまなサンプリング音の断片とその連続を一層音楽的な体験として聴き手にもたらしました。誰もが、どこかで聴いているような日常的な音の断片を、何気ない風景をいたたまれなく幻想的に変化させ、私たちの前に魅せるインプロヴィゼーション(即興演奏)でした。

(柴山拓郎 / SMF運営委員)



Yuji Numano

Carl Stone

Philippe Shatelain

Takeshi Tsuchiya

Masatsune Yoshio

Takuro Shibayama